

釈大典『唐詩解頤』の特殊な訓読について

― 徂徠の詩読解を受け継ぐもの ―

佐藤 進

一、補読と補入

『唐詩選』卷六「五言絶句」のなかの孟浩然「送朱大入秦」を最も流布した服部南郭の訓点で読み下すと以下のようになる。

送朱大入秦　　朱大が秦に入るを送る

遊人武陵去、　　遊人　　武陵に去る

寶劍直千金。　　寶劍　　直千金

分手脱相贈、　　手を分つとき　　脱して相ひ贈る

平生一片心。　　平生　　一片の心

この詩を、釈大典の『唐詩選』訓点本である『唐詩解頤』は以下のように訓読する。

遊人 五陵に去る（南郭本は「武陵」に作るが大典本は「五陵」に訂正する）

寶劍 直千金なるを

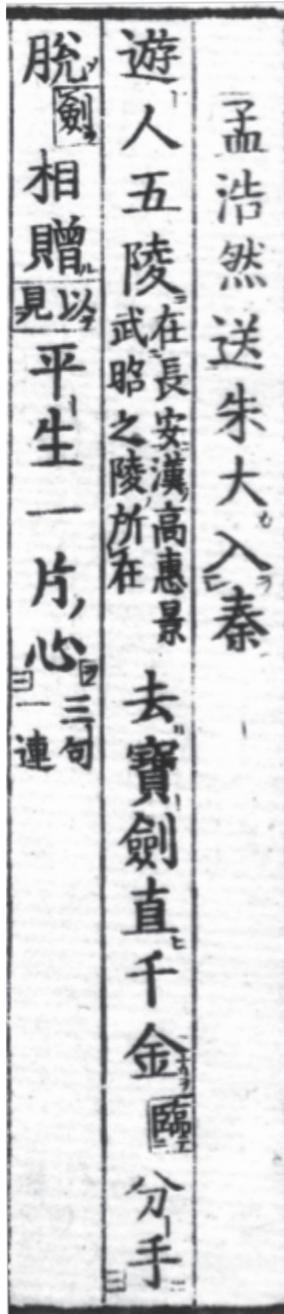
分手に臨んで劍を脱して相ひ贈る

以て平生一片の心を見（あら）わす（大典の挾注に「三句一連」という）

多少散文的な読み方にはなるが、詩意を理解するにはこのほうが容易である。こうした訓読をするために、『唐詩解頤』は原文の転句と結句に以下のような挿入をほどこしている。

【臨】分手脱【劍】相贈

【以見】平生一片心



具体的には画像に見えるように、双行割り注とは異なる区切りが施され、挿入であることが一見して明らかになっている。しかも、挿入によって訓読の語順が変わることを示す新たな返り点と、新たな送り仮名をも添加しているのである。

漢文訓読において、日本語の助詞や助動詞や活用語尾など、漢文の原文にない言葉を補って訓読することを「補読」とい

う。『唐詩解頤』の訓法も原文にない言葉を補うという意味においては補読の一種ではあるが、一般に言う補読は和語でもって原文外の語を補うのが普通であるのに対し、『唐詩解頤』の場合は原文に漢字の語句を挿入する。したがって、『唐詩解頤』の訓法の意図を分析し、その源流を検討する本論においては、一般の補読とは区別してこれを「補入」と呼んで論を進める。

二、大典の略歴

積大典の経歴については小島文鼎『大典禪師』（昭和二年・福田宏一刊）に詳しい。以下それにもとづき、著述を中心に略年譜風に叙述する。

享保四年（一七一九年）五月九日に誕生

俗姓今堀氏、幼名は大次郎、諱は顯常、大典は号。別号に蕉中、東湖など。出生地は近江国神崎郡伊庭郷（今の滋賀県東近江市伊庭町）。自著を「淡海竺顯常」の名で出すことが少なくない。居処を小雲楼という。

享保一三年（一七二八年）十歳

正月一九日、荻生徂徠卒。

八月二五日、京都相国寺塔頭慈雲庵に投じ、独峰和尚に侍す。

享保一四年（一七二九年）十一歳

三月二〇日、独峰和尚によって剃髮得度。このとき幼名「大次郎」を僧名「顯常」に改める。

得度以来、禪宗の講究のかたわら、徂徠門下の積大潮（一六七六年—一七六八年）や、大潮の門下で近江の先達である宇野明霞（一六九八年—一七四五年）に師事して語文の学を治める。

延享二年（一七四五年） 二七歳

四月一七日、宇野明霞卒。

六月、独峰和尚の退隠にともない、相国寺塔頭慈雲庵を住持する。

寛延元年（一七四八年） 三〇歳

四月一四日、夏安居の行を修め（結制）、本山相国寺において秉扨（ひんぼつ）式を行ない、諸山の住持に代わって説法をする資格のある法階に昇った。

十月、『明霞先生遺稿』を編次して刊行。

宝暦六年（一七五六年） 三八歳

九月一三日、本師独峰和尚寂滅。

宝暦九年（一七五九年） 四一歳

二月一二日、慈雲庵を退き寺務を離れて郊外に閑居し、以後十三年ほど読書と著述に専念。

宝暦十一年（一七六一年） 四三歳

九月、『昨非集』刊行。

宝暦十二年（一七六二年） 四四歳

冬、『世説鈔撮』刊行。

宝暦十三年（一七六三年） 四五歳

三月、『詩語解』刊行。

明和五年（一七六八年） 五十歳

八月二三日、积大潮寂滅。

安永元年（一七七二年） 五四歳

四月二三日、慈雲庵に帰庵。

五月、『世説鈔撮補』『文語解』刊行。

九月、『学語編』刊行。

安永二年（一七七三年） 五五歳

九月、『尺牘式』刊行

安永三年（一七七四年） 五六歳

二月、『茶経詳説』刊行。

六月、『唐詩集注』刊行。

安永五年（一七七六年） 五八歳

三月、『唐詩解頤』刊行。

安永六年（一七七七年） 五九歳

五月、『小雲楼手簡初編』刊行。

安永七年（一七七八年） 六〇歳

九月、五山に設定されていた「碩学」に拔擢され、終身俸禄を受領することになる。また、幕府の外交文書を掌る朝
鮮修文職に任じられる。

安永八年（一七七九年） 六一歳

八月五日、本寺相国寺に入寺する（視篆）。

安永九年（一七八〇年） 六二歳

この年、五山碩学・朝鮮修文職の解免を申請したが許されなかった。

天明元年（一七八一年） 六三歳

五月二二日、朝鮮修文職の職責として対馬に到着、居処「以酌庵」に住む。

天明三年（一七八三年） 六五歳

七月八日、対馬での任期を満了して相国寺に帰山。ただ、その後晩年に到るまで、朝鮮通信使饗応の簡略化（対馬で接遇する案）を目指す松平定信のブレーションとして、しばしば江戸城におもむいて相談にあずかった。

天明四年（一七八四年） 六六歳

正月、『尺牘式補遺』刊行。

三月、『聯句式』『初学文譚』刊行。

天明五年（一七八五年） 六七歳

正月二四日、この日付で南禅寺住職の命を受け、紫衣の法階に昇った（改衣）。

天明七年（一七八七年） 六九歳

正月、『皇朝事苑』刊行。

九月、『小雲楼手簡第二編』刊行。

天明八年（一七八八年） 七〇歳

正月から二月にかけて天明大火災。旧臘から朝鮮通信使問題で江戸出府しており、帰洛して、禅師の慈雲庵も全焼したことを知る。

四月、諸家に儒仏の典籍の寄贈を乞い、汲古閣本『二十一史』『淵鑑類函』等、数百部を集めた。

寛政元年（一七八九年） 七一歳

五月、慈雲寺再興なる。

寛政二年（一七九〇年） 七十二歳

正月、『小雲楼詠物詩』刊行。

五月、自著『唐詩解頤』を講義。

寛政四年（一七九二年） 七十四歳

二月一日、自著『唐詩解頤』の講義を継続。

四月、徂徠の『文変』にならった『続文変』を刊行。

五月、『北禅文章』、宇野明霞兄弟の『左伝考』を刊行。

寛政五年（一七九三年） 七十五歳

四月、『世説新語補鈔撮集成』刊行。

七月、『北禅詩草』刊行。

寛政六年（一七九四年） 七十六歳

三月、『小雲楼手簡第三編』刊行。

寛政七年（一七九五年） 七十七歳

六月、『小雲楼手簡第四編』刊行。

九月、『四書越俎』刊行。

寛政一〇年（一七九八年） 八〇歳

この年、宇野明霞の『論語考』を校訂再刻。

寛政一一年（一七九九年） 八一歳

三月、『詩家推敲』を刊行。

寛政一二年（一八〇〇年） 八二歳

五月、『唐詩解頤補遺』を刊行。また『補遺』を合冊した『唐詩解頤』を再刻。

同月、『初学文軌』を刊行。

享和元年（一八〇一年） 八三歳

二月八日、大典禪師寂滅、慈雲院に葬られた。

三、大典の学統

大典が師と仰いだのは略歴に記したように、釈大潮と宇野明霞の二人であった。

釈大潮については、中島吉郎『佐賀先哲叢話』（木下泰山堂、一九〇二年）や鷲尾順敬『日本仏家人名辞書』（光融館、一九一一年再刊）などに簡単な紹介があるが（ともに国立国会図書館でデジタル画像を公開している）、唐話をよくする禅僧としての紹介は石崎又造『近世日本に於ける 支那俗語文学史』（一九四〇年、弘文堂。再刊は一九六七年、清水弘文堂書房）に詳しい。（注一）

大潮、俗姓諫早氏、諱は元皓、字は月枝、号は大潮、また魯寮。延宝六年（一六七八年）、肥前松浦に生まれる。十六歳で肥前蓮池龍津寺の化霖和尚に入門、二十一歳で上洛し、明国渡来僧の黄檗山萬福寺第四代住持を退隠していた独湛性瑩について学んだ。その後、龍津寺に帰山し、元禄末年、長崎において唐話学者上野玄貞に唐話を学び（玄貞は国思靖と呼ばれ、岡島冠山や雨森芳洲も門人であった）、三十歳で再び黄檗山に上って訳事した。翌宝永六年（一七〇九年）江戸に出て徂徠と交わり、徂徠やその門人に唐音を教えたという。

江戸に在ること約八年、享保二年（一七一七年）に一旦肥前に帰るおりに、徂徠は文を序して「予また華音を魯子に学ぶ」と書いている（『送魯子帰清西序』『支那俗語文学史』による）。肥前に帰ってもしばしば上洛し、享保二十年（一七三五年）には黄檗山内の竹林院に住して、元文五年十一月（一七四〇年）にまた肥前に帰るまで、六年近く京都におり、その間に宇野明霞や大典が従学したらしい。大典の十代後半から二十代の初期まで、最も吸収力のある年頃に教えを受けたのである。唐話も学んだことは想像に難くないが、以下のような学問の骨格になることを学んだことは、その後の大典の読書や著述を見てゆく上で参考になる。

大潮が最後に肥前に戻ってから後に（時期は『大典禅師』における推定）、大典が提出した質問に対して、大潮が回答を与えた「答問」が『魯齋文集』に収録されている。その第一問は学ぶべき外典の文章として何を標準に考えるべきかということであり、六経のほかに司馬遷を規範にせよとの回答を与えた。第二問は老子莊子列子と禅宗の関係をいかに捉えるかということであり、精神的には禅宗が優位であるが、諸子の言辭は習得すべきであつて、その際に拠るべき注釈は何かという回答を与えた。第三問は楞嚴経や円覚経などの仏典の研究法を尋ねるものであり、仏典を学ぶ順序は俱舍から始めて、唯識、三論、起信論に円覚経、そして楞嚴経と法華経に至るべきで、また、それぞれの拠るべき注釈は何かという回答を与えた（以上は『大典禅師』による）。

大潮は明和五年（一七六八年）、大典五十歳のときに、享年九十三歳で入滅した。

宇野明霞については、つとに原念斎『先哲叢談』に巻七に十条の紹介がある。

明霞、字は士新、宇野姓を宇と裁して宇と名乗り、宇士新とも呼ばれる。元禄十一年（一六九八年）生、延享二年（一七四五年）卒。『先哲叢談』第一条には「始め章句を向井滄洲（名は三省、字は子魯）に受け、後、師承する所無し」という。東洋文庫本『先哲叢談』（源了圓・前田勉訳注）の注によれば、向井滄洲は、一六六六年生一七三二年卒、摂津の人、木下順庵門である。順庵には木門十哲という十人の俊才が数えられるが、向井滄洲はその一人である（『先哲叢談』木下順

庵第六条)。第一条には師承のないことをいうが、第三条には「士新、李（攀菴）王（世貞）を奉じて古文辞を善くす。然れども徂徠・南郭が輩の作（な）す所と其の趣を殊にす。初め大潮禪師が指授を得」と、釈大潮の指導を受けたこといい、また、「而して近時又大典、能文を以て一時に聞ゆ。此の二釈、緇林に泰斗たるに論勿し。之を操觚者流に求むるも、亦得易からざるなり。而して一は則ち士新に伝え、一は則ち士新に受く」といい、大潮から明霞に伝えられ、明霞から大典に伝えられた師承関係を明らかにしている。ただ、『大典禪師』はこの見解に疑義を呈し、大典にとつては「（大潮禪師の）誘掖の効果は、時間空間に通じ、士新のそれに比して、偉大なものと推測するに難くはない」として、大潮から直接受けた影響の方が大きいのではないかという。

また、徂徠との関係などは石見輝彦「宇野明霞の『語辞解』について」（『汲古』第五号、一九八四年五月）に手際の良い記述があるので下に引用する。

「家は運漕を業としていたため、学に志すも京都にあつて祖先からの学的な素養に乏しいことから人に誹られ、三歳年下の弟士朗とともに勉強しているうちに、二十歳をすぎた頃、荻生徂徠の『文戒』を読み徂徠に私淑するにいたる。明霞自身は病弱な体質であったために遠遊することができず、弟が江戸へ東遊し徂徠の門をたたくことになる。士朗も京都に帰り、宇野兄弟は書を通じて徂徠を慕い、徂徠と交遊があり徂徠学を関西や九州方面まで広めたとされる大潮禪師からも文章の添削を受けるが、やがて享保十三年に徂徠が没し、三年後の享保十六年には宇野士朗までもが三十一歳の若さで逝去してしまう（以上『明霞先生遺稿』卷之三「奉奇物先生」題引、同卷之六「録士朗遺稿序」、同卷之八「復田文瑟書」による）。

その後の宇野明霞はますます部屋に籠り心を潜めて書を読み、奇士との評判を高くしていたことは、明霞四十五歳の寛保二年の風評として太宰春台の「対客論文」に明霞が徂徠を誹るようになったこととともに述べてある（『斥非』附録、及び『春台先生紫芝園後稿』卷之十五所収）。しかし普段から病弱だった明霞は延享二年四月十七日、四十八歳でこの世を去ってしまう。釈大典は二十七歳であった」

大典は、明霞の没後、遺囑であることを断って『明霞先生遺稿』を刊行し（一七四八年）、明霞兄弟の『左伝考』を刊行し（一七九二年）、明霞の『論語考』を校訂再刻した（一八〇〇年）。そのほか、明霞の『語辞解』を敷衍整理したとされる助辞工具書の『詩語解』（一七六三年）、『文語解』（一七七二年）を刊行した。

このうち、『文語解』はその「凡例」冒頭に「此ノ書ハ宇士新ノ語辞解ヲ修補スルナリ」としており、また石見輝彦「宇野明霞の『語辞解』について」に見える『語辞解』の内容と照らしても、確かに明霞の説を補修したものであるだろう。しかし『詩語解』については、明霞の門弟片山北海の「序」および菅原世長の「跋」に明霞の志を継いだものとの記述は見えるが、大典本人の「題引」には宇士新の名は見えない。あまつさえ、明霞の『語辞解』は和文で書かれたものであるが、大典の『詩語解』は漢文で書かれている。これをも修補というのには、ためらいを感じる。ちなみに、「宇野明霞の『語辞解』について」において、石見輝彦氏が『詩語解』について一言半句も言及しなかったのは見識というものであろう。（注二）

四、『唐詩解頤』の書誌

『唐詩解頤』は安永五年が初刊であるが、寛政一二年の再刊本は補遺が合冊されており、筆者の架蔵本も寛政一二年再刊本である。『唐詩解頤』には近年の縮刷影印本はないので、以下に書誌を記す。

木版、四周単辺、内框十八糎×十二糎七厘、半葉十行、本文一行大字十八字、返り点・送り仮名、注双行小字、大字二字に小字三字前後、返り点・送り仮名、上白口、書名「唐詩解頤」、上黒魚尾、横線山形線、中縫「序」「李序」「目録」卷一「五古」卷二「七古」卷三「五律」卷四「排律」卷五「七律」卷六「五絶」卷七「七絶」、下白口、丁数、厚表紙、前紙裏左半分に書名「詩解頤」右半分に「東叡王府蔵版」「翻刻必究」の朱篆、四針眼針法、大きさは二十二糎×十五糎三厘、序跋は卷首に菅原世長「題辞」一葉（安永丙申三月丁丑）、「自叙」二葉、「李于鱗序」一葉、刊記は卷七末に「安永五年丙申三

月」^(注三)、補遺末に「寛政十二年庚申五月 竺常識」の識語、後表紙裏に「平安 田原勘兵衛」、全二冊、第一冊は題辭・自叙・李于鱗序・目録の五丁、巻一「五古」六丁、巻二「七古」二十丁、巻三「五律」十七丁、巻四「排律」十七丁、第二冊は巻五「七律」二十三丁、巻六「五絶」十二丁、巻七「七絶」三十二丁、「補遺」九丁。

近年の影印本はないが、明治になって和装写真製版の本が出た。筆者の架蔵は「浪華書肆 嵩山堂出版」のもので四冊本。刊年の記載はないが奥付けに版元の広告があり、「東京帝国大学・京都帝国大学・高等師範学校・第一高等学校・学習院・帝国図書館 御用書肆」とあるので、この中では成立がもつとも遅い京都帝国大学開学の明治三〇年以後の印刷であろう。また、国文学研究資料館の近代書誌近代画像データベースには、明治四〇年開業京都藁文堂刊行の影印本の書誌情報と六枚の画像が公開されている。^(注四) さらに、初版本の全葉が見たければ、新潟大学附属図書館古籍コレクションデータベース佐野文庫に画像が公開されていて便利である。^(注五)

五、大典補入の体例

本論の冒頭で紹介したように、『唐詩解頤』は『唐詩選』の原詩に、取意のしやすくなるような字句を補入したうえで訓点を打ちなおしている。服部南郭の『唐詩選』は四百六十五首を収録するが、『唐詩解頤』はその四百六十五首に王維の三首と王昌齡の二首を加えた合計四百七十首を収録するものである。その四百七十首のうち、大典は百三十三首に補入を行なった(二十八%)。これだけ多く補入している以上は、『唐詩解頤』を読むことはすなわちこの補入をしつかりと読み解くことにほかならない。

本章では大典による補入の体例を紹介しながら、その意義を考えてみたい。各々の作品の分類帰属については、筆者の関心にもとづく主観によるもので、これが絶対というものではない。

(一) 動詞句・形容詞句を補って、状況を分かりやすく説明する。補入が文の述語となることもあり、連用修飾語となることもある。

① 「使清夷軍入居庸」(高適)の第三句第四句「不知邊地別、祇訝客衣單」には「不知邊地別【多寒氣】、祇訝客衣單」のように「多寒氣」の三字を補入し、補入にともなう必要になる送り仮名と返り点の修正と追加を行なっている。服部南郭の訓点にしたがえば「辺地の別なることを知らず、祇(ただ)客衣(かくい)の単(ひとえ)なるを訝(いぶかる)となるが、大典の訓点にしたがえば「邊地の別【に寒氣多き】ことを知らず、祇客衣單なるを訝」となる。(注六)「邊地別(辺地は格別だ)」という、本来は主語述語構造の述語「別」を、「格別に(多い)」という副詞としてとらえ、「寒氣多」を主語「邊地」の述語として補入し(漢語の文法では主述述語という。小主語「寒氣」+小述語「多」が大主語「邊地」の大述語となる)、どうして格別なのかを読者に分かりやすく提示したわけである。

② 「登岳陽樓」(杜甫)の第五句第六句「親朋無一字、老病有孤舟」には「親朋無一字【相存問】、老病【無家而只】有孤舟」のように補入する。服部南郭の訓点にしたがえば「親朋 一字無く、老病 孤舟有り」となるが、大典の訓点にしたがえば「親朋一字【の相存問する】無く、老病【家無くして只だ】孤舟有り」となる。ここではどういふ「一字」すら無いのか「無」の目的語となる動詞句を補入し、どうして「孤舟」なのか「無家」という述語と接続詞「而」、「有」を修飾する副詞「只」とを補入して、その状況を読者に提示する。

③ 「同王徵君洞庭有懷」(張謂)の第五句第六句「不用開書帙、偏宜上酒樓」には「不用開書帙、偏宜上酒樓【以遣客愁】」のように補入する。服部南郭の訓点にしたがえば「用いず 書帙(しょちつ)を開くことを、偏(ひとえ)に宜(よろし)しく酒樓に上るべし」となるが、大典の訓点にしたがえば「書帙を開くことを用いず、偏に宜く酒樓に上【って以て客愁を遣る】べし」となる。接続詞「以」の後に「遣客愁」を補って、酒樓に上る目的を読者に提示したのである。この体例(一)に属する補入は以下の二十九首に見られる。「書堂飲既夜復邀李尚書下馬月下賦」(杜甫)では詩題に補入

しているのみで本文にはない。「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」(杜甫)・「哀江頭」(杜甫)・「使清夷軍入居庸」(高適)・「房兵曹胡馬詩」(杜甫)・「登岳陽樓」(杜甫)二例・「同王徵君洞庭有懷」(張謂)・「奉和聖製送尚書燕國公赴朔方」(張九齡)・「送祕書晁監還日本」(王維)二例・「送柴司戶充劉卿判官之嶺外」(高適)・「重經昭陵」(杜甫)・「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」(杜甫)・「江陵望幸」(杜甫)・「酬郭給事」(王維)・「登樓」(杜甫)二例・「秋興四首」(杜甫)・「閣夜」(杜甫)二例・「送朱大入秦」(孟浩然)・「送郭司倉」(王昌齡)二例・「尋隱者不遇」(賈島)・「哥舒歌」(西鄙人)・「贈蘇綰書記」(杜審言)・「聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄」(李白)・「春宮曲」(王昌齡)・「少年行」(王維)・「書堂飲既夜復邀李尚書下馬月下賦一詩題」(杜甫)・「九曲詞」(高適)・「春行寄興」(李華)・「涼州詞」(張籍)・「郡中即事」(羊士諤)。

(二) 名詞句の前に動詞を補入し名詞句をその目的語に変換する。

詩は句の字数が限られているために、名詞を置くだけでそれと関係する動詞を省くことが少なくない。大典は詩人の意識にあったであろう動詞を補入する。

① 「感遇」(張九齡)の第五句第六句「矯矯珍木巔、得無金丸懼」には「**在**」矯矯珍木巔、得無金丸懼**【耶】**のように、動詞「**在**」を補って「矯矯珍木巔」をその目的語にする(第六句の文末助詞の補入については後述する)。服部南郭の訓点にしたがえば「矯矯(きょうきょう)たる珍木の巔(いただき)、金丸(きんがん)の懼(おそ)れ無きことを得んや」となるが、大典の訓点にしたがえば「矯矯**【として】**珍木の巔**【に在り】**、金丸の懼れ無きことを得ん**【や】**」となる。高くそびえる木の梢にはカワセミの巢があると上文で歌っており、「その巢が珍木の頂にあるならば、(パチンコの)弾も中るまい」という説明的な句にして読ませるのである。このでの「**在**」の補入はほかにもある。

② 「少年行」(王維)の第一句「出身仕漢羽林郎」には「出身仕漢**【為】**羽林郎」のように、動詞「**為**」を補って「羽林郎」をその目的語にする。服部南郭の訓点にしたがえば「出身 漢に仕(つか)ふ 羽林郎(うりんろう)」となる

が、大典の訓点にしたがえば「出身漢に仕へ【て】羽林郎【と為る】」となり、「羽林郎」という役職に「ついた」ことを明示する。「為」補入の例はほかにもあり、同じ機能の「作」の補入もある。

③「重經昭陵」(杜甫)の第三句第四句「風塵三尺劍、社稷一戎衣」は名詞+数(量) 詞+名詞という羅列であるが、

【平】風塵【以】三尺劍、【立】社稷【在】一戎衣のように動詞「平」「立」「在」と前置詞「以」を補って、それぞれの名詞句をその目的語としている。服部南郭の訓点にしたがえば「風塵【を平ぐるに】三尺の劍、社稷【を以てして】、社稷【を立つること】一戎衣【に在り】」となり、それぞれの名詞句がどういふ作用を受けるかを提示する。

この体例(二)に属する補入は以下の二十二首に見られる。「感遇」(張九齡)・「玉華宮」(杜甫)・「公子行」(劉廷芝)・「代悲白頭翁」(劉廷芝)・「短歌行贈王郎司直」(杜甫)・「飲中八仙歌」(杜甫)・「帝京篇」(駱賓王) 二例・「使至塞上」(王维)・「宿龍興寺」(綦母潛)・「同饒陽將軍兼源州都督御史中丞」(蘇頌)・「陪張丞相自松滋江東泊渚宮」(孟浩然)・「重經昭陵」(杜甫) 二例・「紅樓院應制」(沈佺期)・「送朱大入秦」(孟浩然)・「田家春望」(高適)・「幽州」(李益)・「聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄」(李白)・「與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛」(李白)・「長信秋詞三首之三」(王昌齡) 南郭本未収・「出塞行」(王昌齡)・「送薛大赴安陸」(王昌齡)・「少年行」(王維)・「送李判官之潤州行營」(劉長卿)。

(三) 動詞の補入には右の二機能のほかに、以下のようなさまざまな機能を有する補入がある。

①動詞句の前に「欲」を補入して意志願望を明示する。「盧溪別人」(王昌齡)・「九曲詞」(高適)。②動詞「謂」を補入し以下の語句が発言内容・思考内容であることを明示する。「至端州驛見杜五審言沈三佺期闔五朝隱王二無競題壁慨然成詠」(宋之問)・「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」(杜甫)。③「問知」を文頭に置きその文が質問の結果得た情報であることを示す。「使至塞上」(王维)。④「く」している」という持続相を示す「有」を補入する。「竹里館」(王维)。⑤動

作の目的を示す動詞句を補入して連動句にする。「後出塞」(杜甫)・「丹青引贈曹將軍霸」(杜甫)。「後出塞」では「部伍各見招【而聽号令】」すなわち「部伍各招(よば)れて【号令を聴く】」という訓読になる。⑥もとの動詞句を補入名詞の修飾語に変え、全体を有字句に変換する。「九日」(崔國輔)。「九日陶家雖【有】載酒【之興】」すなわち「九日陶家 酒を載する【興有り】と雖ども」という訓読になる。⑦可能を表す動詞「得」を句の前に置く。「冬日洛城北謁

玄元皇帝廟」(杜甫) (注七)

(四) 原詩の動詞の前に助動詞を補入する。

「酌酒與裴迪」(王維)の第一句「酌酒與君自寬」には「酌酒與君君【須】自寬【心】」のように「寛」の目的語「心」とともに、当為の助動詞「須」を補う。服部南郭の訓点にしたがえば「酒を酌んで君に与ふ 君自(みずか)ら寛(ゆる)ふせよ」となるが、大典の訓点にしたがえば「酒を酌んで君に與ふ 君自ら【心を】寛ふ【すべし】」となって、命令口調「せよ」が「ゝするがよい」という語気の緩んだニュアンスに変わる。

この体例(四)に属する補入は以下の八首に見られる。「丹青引贈曹將軍霸」(杜甫)・「長安古意」(盧照鄰)・「秋思」(李白)・「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」(杜甫)・「酌酒與裴迪」(王維)・「雜詩二首」(王維) 南郭未収・「尋隱者不遇」(賈島)・「少年行」(王維)。

(五) 補入によって人物を明示、あるいは人物の属性を明示する。

①「帝京篇」(駱賓王)には「趙李」「蕭朱」「田竇」「衛霍」「馬卿」というように、氏名の一部のみを入れた詩句がある。大典はこれらについて「趙【飛燕】・李【婕妤】」「蕭【育】・朱【博】」「田【蚡】・竇【嬰】」「衛【青】・霍【去病】」「【司】馬【長】卿」のようにフルネームにして示す。これらは注釈という性質のものではなく、あくまでも本文に補入

して、そのうえで訓読に読み込むのである。

②「長安古意」(盧照鄰)の第十七句第十八「借問吹簫向紫煙、曾經學舞度芳年」には「借問吹簫向紫煙【之人】、曾經學舞度芳年【者也】」のように「之人」や「者」などを補って、その前の語句が人物を表すことを示す。服部南郭の訓点にしたがえば「借問(しゃもん)す 簫(しょう)を吹いて紫煙に向ふ、曾(かつ)て経(へ)て舞を學んで芳年(ほうねん)を度(わた)りしことを」となるが、大典の訓点にしたがえば「簫を吹て紫煙に向ふ【人を】借問すれば、曾經(かつて) 舞を學んで芳年を度(すご)しき【者なり】」となつて、南郭の解では第十八句は質問の内容になるが、大典の解では質問の回答になり、現代の諸訳注のとる解釈に合致する。(注八)

「帝京篇」(駱賓王)の第八十三句「紅顏宿昔白頭新」には「紅顏【之人交蜜如從】宿昔白頭【之人交疎如】新【相識】」のように丁寧に補い、服部南郭の訓点にしたがえば「紅顏宿昔(しゆくせき) 白頭新なり」となるが、大典の訓点にしたがえば「紅顏【の人 交(まじわ)り蜜なること】宿昔【從するが如し】白頭【の人 交り疎なること】新なる【相識の如し】」となつてもはやほとんど散文の語句になつてしまふが、分かりやすくなつた。

この体例(五)②に属する補入は以下の五首に見られる。「長安古意」(盧照鄰)・「帝京篇」(駱賓王)二例・「野望」(王績)・「長干曲」(崔顥)・「奉送五叔入京兼寄綦母三」(李頎)。

③「代悲白頭翁」(劉廷芝)の第十七句第十八句「公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前」には「【与】公子王孫【在】芳樹下、【同】清歌妙舞【于】落花前」のように、動詞「在」「同」や前置詞「于」を補うとともに、人物が随伴者であることを示す前置詞「与」を補入する。服部南郭の訓点にしたがえば「公子王孫 芳樹(ほうじゆ)の下(もと)、清歌妙舞 落花の前」となるが、大典の訓点にしたがえば「公子王孫【と】芳樹の下に【在て】、清歌妙舞【を】落花の前に【同じふしき】」となる。そう訓読することで、白頭翁と公子王孫との関係が明示され、今は白髪の人もかつては公子王孫たちといっしょになつて花園での宴会を楽しんだものだといふ詩意が明らかになる。

この体例(五)③に属する補入は以下の十首に見られる。「代悲白頭翁」(劉廷芝)・「下山歌」(宋之問)・「帝京篇」(駱賓王)・「使至塞上」(王維)・「醉後贈張九旭」(高適)・「浥湖山寺」(張說)・「長干曲」(崔顥)・「江南行」(張潮)・「登樓寄王卿」(韋應物)・「寄楊侍御」(包何)。

④「送別」(王維)の第五句「但去莫復問」には「君」但去【吾】莫復問のように「君」「吾」二つの主語を補入している。服部南郭の訓点にしたがえば「但(ただ) 去れ復(ま) た問ふことなかれ」となるが、大典の訓点にしたがえば「君」但去れ【吾】復た問ふこと莫からん」となり、南郭が相手にこれ以上問うなという解釈をしたのに対して、自分はこの以上問うことはしないというように、動作主体の解釈が南郭の解釈とは異なることを明らかにしており、現代の諸訳注の解釈に合致する。

この体例(五)④に属する補入は以下の六首に見られる。「送別」(王維)二例・「幽居」(韋應物)・「長安古意」(盧照鄰)・「遙同杜員外審言過嶺」(沈佺期)・「青樓曲」(王昌齡)・「少年行」(王維)。

(六) 場所を明確化するための語句を補入をする。

①「哀江頭」(杜甫)の第十四句「血汚遊魂歸不得」には「血汚【馬冤路上】遊魂歸不得」のように血が汚したところ「馬冤路上」を補入して具体的な場所を明示している。服部南郭の訓点にしたがえば「血汚(けが)して遊魂歸ることを得ず」となるが、大典の訓点にしたがえば「血【馬冤路上に】汚して遊魂歸ること得ず」というように、事件とそれが見えに歴史上有名になった地名とを関係づける読みになる。

この体例(六)①に属する補入は以下の五首に見られる。「哀江頭」(杜甫)・「贈喬琳」(張謂)・「龍池篇」(沈佺期)・「蜀中九日」(王勃)・「少年行」(王維)。

②「公子行」(劉廷芝)の第五句第六句「綠波清迴玉為砂、青雲離披錦作霞」には「綠波【之涯】清迴玉為砂、青雲【之

【際】離披錦作霞」のように領属助詞「之」と場所を表す普通名詞「涯」「際」を補入して、普通名詞「緑波」「青雲」を場所化して主語の役割をはずし、もとの一句二文を一句一文の構造に変えている。服部南郭の訓点にしたがえば「緑波清迴（せいけい）玉を砂（いさご）と為（な）し、青雲離披（りひ）錦（にしき）を霞（かすみ）と作（な）す」となるが、大典の訓点にしたがえば「緑波【の涯】清迴として玉を砂と為（し）、青雲【の際】離披として錦を霞と作（す）」となる。

文法的効果は全く同じではないが、この体例（六）②に属する補入は以下の十一首に見られる。「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」（杜甫）・「城傍曲」（王昌齡）・「帝京篇」（駱賓王）・「扈從登封途中作」（宋之問）・「酬蘇員外味道夏晚寓直省中見贈」（沈佺期）・「奉和聖製送尚書燕國公赴朔方」（張九齡）・「返照」（杜甫）・「江行無題」（錢起）・「清平調詞三首之二」（李白）・「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」（李白）^{（注九）}・「送杜十四之江南」（孟浩然）^{（注十）}

③（四）①に引いた「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」（杜甫）の第十一句第十二句「世家遺舊史、道德付今王」には「雖」世家遺【于】舊史、【得】道德付【于】今王」のように、「舊史」「今王」の前に前置詞「于」を補入し、その後ろの名詞句が広い意味でその前の動詞の動作が行われる場所であることを明示する。この前置詞はしばしば省略される、というより元来付加されない構文が少なくない。したがって訓読にはほとんど影響がなく、同じ読みになる。

この体例（六）③に属する補入は以下の四首に見られる。「代悲白頭翁」（劉廷芝）・「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」（杜甫）二例・「閣夜」（杜甫）二例・「返照」（杜甫）。

（七）時間を表す語句を補入する。

①「送劉校書從軍」（楊炯）の第十句「琴尊此日同」には「琴尊此日【暫得相】同」のように動詞「得」範圍副詞「相」のほかにも時間副詞「暫」を補入する。服部南郭の訓点にしたがえば「琴尊（きんそん）此の日同じ」となるが、大典の訓

点にしたがえば「琴尊此の日【暫く相】同じ【くすること】を【得たり】」となつて、たとえ時間は短くても惜別の情を分かち合うことができることを喜ぶ気持ち伝わつて来る。

この体例（七）①に属する補入は以下の三首に見られる。「送劉校書從軍」（楊炯）・「奉和聖製送尚書燕國公赴朔方」（張九齡）・「思君恩」（令狐楚）二例。

②「涼州詞」（王翰）の第二句「欲飲琵琶馬上催」には「欲飲【之時】琵琶馬上催」のように領屬助詞「之」と時間名詞「時」を補入して時態を明示する。服部南郭の訓点にしたがえば「飲まんと欲して琵琶（びわ）馬上（ばじょう）に催（もよお）す」となるが、大典の訓点にしたがえば「飲まんと欲するの時 琵琶馬上に催す」となり、正にその時という時態を明示する。

この体例（七）②に属する補入は以下の五首に見られる。「飲中八仙歌」（杜甫）・「臨洞庭」（孟浩然）・「聽江笛送陸侍御」（韋應物）・「涼州詞」（王翰）・「江南行」（張潮）二例。（注十二）

（八）単音節語を二音節化して語義を明確にする。

①「闕下贈裴舍人」（錢起）の第五句「陽和不散窮途恨」には「陽和不【消】散窮途恨」のように「消」字を補入し、単音節動詞「散」を二音節動詞「消散」にして、多義語「散」の語義を明確にしている。服部南郭の訓点にしたがえば「陽和（ようか）窮途（きゅうと）の恨を散（さん）ぜず」となるが、大典の訓点にしたがえば「陽和窮途の恨を【消】散せず」となり「恨みを消す」という詩意が明確になる。

この体例（八）①に属する補入は以下の四首に見られる。「經下邳圯橋懷張子房」（李白）・「奉和聖製送尚書燕國公赴朔方」（張九齡）・「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」（杜甫）・「闕下贈裴舍人」（錢起）。

②前項は動詞の二音節化であるが、名詞の二音節化も存在する。「丹青引贈曹將軍霸」（杜甫）の第二句「於今為庶為清

門」には「於今為庶【姓】為清門」のように「姓」字を補入し、単音節名詞「庶」を二音節名詞「庶姓」にして、多義語「庶」の語義を明確にしている。服部南郭の訓点にしたがえば「今に於いて庶（しよ）為（た）れども清門為（た）り」となるが、大典の訓点にしたがえば「今に庶【姓】為れども清門為り」となる。

此の体例（八）②に属する補入は以下の十五首に見られる。「丹青引贈曹將軍霸」（杜甫）・「邯鄲少年行」（高適）・「長安古意」（盧照鄰）三例・「送劉校書從軍」（楊炯）三例・「奉和晦日幸昆明池應制」（宋之問）・「和許給事中直夜簡諸公」（張九齡）二例・「奉和聖製送尚書燕國公赴朔方」（張九齡）・「陪張丞相自松滋江東泊渚宮」（孟浩然）・「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」（杜甫）・「紅樓院應制」（沈佺期）二例・「宣政殿退朝晚出左掖」（杜甫）・「黃河即事寄府縣僚友」詩題（韋應物）・「奉和庫部盧四兄曹長元日朝回」（韓愈）・「渡湘江」（杜審言）・「封大夫破播仙凱歌二首」（岑參）。

③「宿龍興寺」（綦母潛）の第六句「青蓮喻法微【妙】」のように「妙」字を補入し、単音節形容詞「微」を二音節形容詞「微妙」にして、多義形容詞「微」の語義を明確にしている。服部南郭の訓点にしたがえば「青蓮（せいれん）喻法（ゆほう）微（び）なり」となるが、大典の訓点にしたがえば「青蓮法に喩へて微【妙】なり」となる。

この体例（八）③に属する補入は以下の二首に見られる。「宿龍興寺」（綦母潛）・「同饒陽將軍兼源州都督御史中丞」（蘇頌）。

④「醉後贈張九旭」（高適）の第一句「世上謾相識」には「世上【皆泛】謾相識」のように副詞「皆」字を補入するとともに、単音節副詞「謾」を二音節副詞「泛謾」にして、「いい加減に・適当に」の語意を明確にしている。服部南郭の訓点にしたがえば「世上謾（まん）に相識（あいし）る」となるが、大典の訓点にしたがえば「世上【皆泛】謾に相識る」となる。

この体例（八）④に属する補入は以下の二首に見られる。「幽居」（韋應物）・「醉後贈張九旭」（高適）。

⑤「帝京篇」(駱賓王)の第四十七句「倡家桃李自芬菲」には「倡家桃李【各】自芬菲」のように単音節代詞「自」を二音節代詞「各自」にして、「自」がほかの品詞語義ではないことを示す。服部南郭の訓点にしたがえば「倡家の桃李自(おのづか)ら芬菲(ほうひ)」となるが、大典の訓点にしたがえば「倡家の桃李【各】自に芬菲」となり、「桃李が自ずと」の意ではなく「桃李のそれぞれが」の意に解釈し直される。代詞の二音節化はこれが唯一の例である。

(九) 詩には様々な比喻表現があるので、比喻表現が生ずる状況を説明したり、詩中の語句が比喻であることを明確化するような補入がある。

①「與高適薛據登慈恩寺浮圖」(岑參)の第十一句「連山若波濤」には「連山【低視】若波濤」のように動詞句「低視」を補入して波濤のごとく見える条件を明示する。服部南郭の訓点にしたがえば「連山波濤(はとう)の若(ごと)く」となるが、大典の訓点にしたがえば「連山【低視して】波濤の若し」となる。

この体例(九)①に属する補入は以下の二首に見られる。「與高適薛據登慈恩寺浮圖」(岑參)・「烏夜啼」(李白)。

②「高都護驄馬行」(杜甫)の第十四句「走過掣電傾城知」には「走過【猶如】掣電傾城知」のように「猶如」を補入して、以下の語句が比喻であることを明示する。服部南郭の訓点にしたがえば「走過掣電(せいでん)城を傾けて知る」となるが、大典の訓点にしたがえば「走過すること【猶】掣電【の如し】城傾(こぞつ)て知る」となり、「掣電」が比喻であることが明確になる。

この体例(九)②に属する補入は以下の七首に見られる。補入する語としては「猶」「如」「似」など。「高都護驄馬行」(杜甫)・「丹青引贈曹將軍霸」(杜甫)・「帝京篇」(駱賓王)・「行次昭陵」(杜甫)・「重經昭陵」(杜甫)二例・「宿瑩公禪房聞梵」(李頎)・「客中行」(李白)。

(十) 普通名詞に語句を追加して意味を敷衍する補入がある。

「登辨覺寺」(王維)の第八句「觀世得無生」には「觀世【界相】得無生」のように「世」字に「界相」の語句を加えて語義を敷衍している。服部南郭の訓点にしたがえば「世を觀(かん)じて無生(むせい)を得たり」となるが、大典の訓点にしたがえば「世【界の相】を觀じて無生を得たり」となる。何を觀じるか、その対象が極めて明快に理解できる。

この体例に属する補入は以下の十四首に見られる。「述懷」(魏徵)・「登辨覺寺」(王維)・「使至塞上」(王維)・「胡笳曲」(王昌齡)・「送柴司戸充劉判官之嶺外」(高適)・「再入道場紀事」(沈佺期)・「奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制」(王維)・「送李少府貶峽中王少府貶長沙」(高適)・「望野」(杜甫)・「贈蘇綰書記」(杜審言)・「聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄」(李白)・「春思二首之二」(賈至)・「山房春事」(岑參)・「渡桑乾」(賈島)。

(十一) 名詞句の前に修飾語や限定語や指示詞等を補入する。

「短歌行贈王郎司直」(杜甫)の第六句「西得諸侯權錦水」には「西得【遇賢】諸侯權錦水」のように動詞「遇」と同時に「諸侯」を修飾する「賢」字を補入し、「諸侯」が単なる諸侯ではなく見識を備えた諸侯であることを示す。服部南郭の訓点にしたがえば「西のかた諸侯を得て錦水に棹(さお)ささば」となるが(南郭は「權」を「棹」に作る)、大典の訓点にしたがえば「西のかた【賢】諸侯【に遇】ことを【得て錦水に權ささば】」となる。

この体例に属する補入は以下の十一首に見られる。「韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬圖引」(杜甫)・「邯鄲少年行」(高適)・「帝京篇(駱賓王)」・「長寧公主東莊侍宴」(李嶠)・「紅樓院應制」(沈佺期)・「五日觀妓」(萬楚)・「黃河即事寄府縣僚友」(詩題)・「韋應物」・「陸勝宅秋雨中探韻」(張南史)・「蜀中九日」(王勃)・「九曲詞」(高適)・「楊柳枝」(段成式)。

(十二) 色々な接続詞を補入して語句の関係を明確化する。

①「高都護驄馬行」(杜甫)の第二句「聲價欵然來向東」には「固有」聲價【而】欵然來向東のように副詞「固」動詞「有」を補うほかに、接続詞「而」を補入して因果関係を明示する。服部南郭の訓点にしたがえば「聲價(せいか)欵然(こつぜん)として來たりて東(ひんがし)に向かふ」になるが、大典の訓点にしたがえば「固より」聲價【有りて】欵然として東に來たる」となる。ただ、この関係概念は訓読に直接反映するものではない。

この体例(十二)①に属する補入は以下の三首に見られる。「烏夜啼」(李白)・「高都護驄馬行」(杜甫)・「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」(杜甫)。

②例句は省くが、「返照」(杜甫)・「尋隱者不遇」(賈島)・「哥舒歌」(西鄙人)の三首では逆接の接続詞を補入し、「少年行」(王維)では仮定の接続詞を補入する。

(十三) 句意を明らかにするために各種の前置詞を補入する。

「丹青引贈曹將軍霸」(杜甫)の第十六句「英姿颯爽來酣戰」には「英姿颯爽【似】來【自】酣戰」のように比喻を明示する動詞「似」と同時に起点を示す前置詞「自」を補入する。服部南郭の訓点にしたがえば「英姿颯爽(さつそう)として酣戰(かんせん)より來たる」となるが、大典の訓点にしたがえば「英姿颯爽として酣戰より來たる【に似たり】」となる。「より」についていえば前置詞があってもなくても訓読は同様にはなるが、前置詞があると原文を読む際には明解な補助になる。

起点を示す前置詞はこのほかに、「出塞行」(王昌齡)・「渡揚子江」(丁仙芝)があり、場所を示す前置詞「向」を補入した「逢入京使」(岑參)や、比較を示す前置詞「于」を補入した「丹青引贈曹將軍霸」(杜甫)などがある。

(十四) 句意を明らかにするために各種の副詞を補入する。

「酔後贈張九旭」(高適)の第一句「世上謾相識」には「世上【皆泛】謾相識」のように単音節語「謾」を二音節化する。「泛」字の補入と同時に、範圍副詞「皆」字を補入して「いい加減な付き合い」をするのがほとんどだという範圍を示している。服部南郭の訓点にしたがえば「世上謾(まん)に相識(あいし)る」となるが、大典の訓点にしたがえば「世上【皆泛】謾に相識る」となる。

範圍副詞の補入はほかに「登岳陽樓」(杜甫)・「送劉校書從軍」(楊炯)・「遙同杜員外審言過嶺」(沈佺期)・「竹里館」(王維)・「出塞行」(王昌齡)・「涼州詞」(張籍)などがある。

そのほかに、累加副詞「亦」を補入した「代悲白頭翁」(劉廷芝)や、逆接副詞「却」を補入した「登樓」(杜甫)がある。

(十五) 漢語は「主語＋動詞＋目的語」タイプの文構造が基本なので、しかるべき目的語があるべきだという判断から目的語を補入する。

「奉和聖製暮春送朝集使歸郡」(王維)の第十句「歸分漢主憂」には「歸【郡國】分漢主憂」のように目的語「郡國」を補入して文を安定したものにしている。服部南郭の訓点にしたがえば「歸って漢主の憂(うれ)へを分(わか)つ」となるが、大典の訓点にしたがえば「【郡國に】歸って漢主の憂を分かつ」となる。

同様な補入は「送朱大入秦」(孟浩然)にもみられるが、「送劉評事充朔方判官賦得征馬嘶」(高適)の場合は授与動詞「贈」に第二目的語「此詩」を補入するというもので、大典の語法認識の高さが反映したものである。また「芙蓉樓送辛漸」(王昌齡)では動詞「問」の目的語として問いの具体的な内容を補入している。

(十六) 漢語の文法には補語という日本語の文法の枠組みにはないものがあり、句意からみて適切な補語を補入する。

「公子行」(劉廷芝)の二十一句と二十二句「願作輕羅著細腰、願為明鏡分嬌面」には「願作輕羅著【在】細腰、願為明鏡分【取】嬌面」のように、結果補語「在」「取」を補入している。服部南郭の訓点にしたがえば「願(ねが)はくは輕羅と作つて細腰(さいよう)に著(つ)かん、願はくは明鏡と為つて嬌面(きようめん)を分(わか)たん」となるが、大典の訓点にしたがえば「願は輕羅と作(なり)て細腰に著【在】せん、願は明鏡と為(なり)て嬌面を分【取】せん」となつて、訓読としてはかえつて煩わしくなるが、原文の句意は明確になる。結果補語の補入はほかに「飲中八仙歌」(杜甫)・「送李回」(李頎)・「登樓」(杜甫)・「奉和嚴武軍城早秋」(杜甫)などに見られ、「聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄」(李白)の場合は動詞「過」に方向補語「來」を補入する。

(十七) (疑問・指示) 代詞に名詞を補入し指示対象を明確化する。

「早發始興江口至盧氏村作」(宋之問)の第十五句「何當首歸路」には「何【時】當首歸路」のように「何」が何を指すかを明示する。服部南郭の訓点にしたがえば「何(いつ)か當(まさ)に歸路に首(むか)ふべき」となるが、大典の訓点にしたがえば「何【時か】當に歸路に首(むか)ひ」となる。これも訓読自体には大きな影響を及ぼさないが、原文の句意は分かりやすくなる。同様の補入は「陪張丞相自松滋江東泊渚宮」(孟浩然)・「奉使巡檢兩京路種果樹事畢入秦因詠歌」(鄭審)にも見られる。

(十八) 理由を示す「く故也」などの語句を補入する。

「送張子尉南海」(岑參)・「班婕妤二首之二」(王維)などがそうであるが、二つ目のものは南郭本には未収の作品である。

(十九) 領属助詞「之」を補入する。

「人日寄杜二拾遺」(高適)・「長安古意」(盧照鄰)・「紅樓院應制」(沈佺期)・「勅賜百官櫻桃」(王維)・「蜀中九日」(王勃)・「渡湘江」(杜審言)などに「之」の補入が見られるが、訓読自体には大きな影響を及ぼさない。

それと同じような働きをするものとして、「代悲白頭翁」(劉廷芝)では所有格代詞「吾」を補入しており、この有無は訓読に影響する。「今年花落ちて」【吾が】顔色【亦】改まる」が大典の訓読である。

(二十) 「所」字句を補入する。

「題松汀驛」(張祜)の第六句「人煙小徑通」には「人煙【所起】小徑通」のようにいわゆる所字句を補入して、そこで何が起こっているかを提示する。服部南郭の訓点にしたがえば「人煙小徑(しょうけい)通ず」となるが、大典の訓点にしたがえば「人煙【の起る所】小徑通ず」となり、論理的に明晰なものとなる。同様な補入には「秦州雜詩」(杜甫)に二例ある。

(二十一) 文意を明らかにするために文末助詞を補入する。

「感遇」(張九齡)の第六句「得無金丸懼【耶】」のように補入するが、訓読では助字があってもなくても影響がない。文末助詞の補入はほかに「幽居」(韋應物)・「長安古意」(盧照鄰)があるが、後者は反語を示す副詞「豈」と同時に「耶」が補入されている。

原文に補入するのは右に分類したものがすべてで、ほかに「早發始興江口至盧氏村作」(宋之問)では、原文に補入はせず返り点のみの訂正補入の例がある。ちなみに本論冒頭で紹介したように、原文に字句を補入し、それにともなう返り点の訂正がある場合には、大典は煩をいとわずもとの返り点と訂正した返り点とを併記するのが通例である。

六、補入の先例と大典の補入

大典の右に紹介したような補入は、先達の先例に倣つてのことであつた。『唐詩解頤』の刊行に先立つ二年前、一七七四年に『唐詩集注』^(注十二)を刊行しているが、その巻首「凡例」に以下のように言う（原文は漢文に返り点送り仮名つき。いま書き下して示す）。

「薄益大師の佛經を註する、多く一二の語を挿入して以て本文を補ふ。簡にして解し易し。物氏「絶句解」を作るに一に斯法を以てす。今亦往往に之を用い領會し易からしむ」

薄益大師とは明の学僧智旭（一五九九年生まれ一六五五年卒）のことである。智旭、俗姓は鍾、字智旭、薄益と号した。天台宗の僧であつたが、禪宗・華嚴宗・法相宗に通じ、晩年には浄土宗の教義もおさめ、その九祖となつた。いま全二十一冊の『薄益大師全集』（巴蜀書社、二〇一三年）が伝わる。

『唐詩集注』「凡例」にいう薄益補入の例は、たとえば『佛説阿彌陀經要解』に以下のようなものがある。『佛説阿彌陀經要解』は鳩摩羅什訳の『佛説阿彌陀經』に詳細な注釈を施したものであるが、その鳩摩羅什訳本文に「如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園與大比丘僧。千二百五十人俱。皆是大阿羅漢【之位。其德為】眾所知識」のように、「之位。其德為」を補入している。^(注十三) こういう補入は、おそらく明代の注解の特色の一つであつて、それまでにはあまりなかつたものである。^(注十四)

「凡例」によれば、この方式を受けたのが荻生徂徠の『絶句解』である。『絶句解』は一七二三年享保八年ごろの成稿で、一七三二年享保一七年の刊本と（服部南郭序）一七六三年宝暦一三年の刊本とがある（後者は荻生金谷・宇佐美瀧水の校訂

句読本)。(注十五)

いま河出書房新社版『荻生徂徠全集』第五卷に収める『絶句解』についてみると、徂徠の補入はほとんどが一字で、二字の補入も散見するがそれほど多くはない。三字以上はまれで、李樊竜の七絶に注解をつけた『滄冥七絶三百首解』の以下の例などは珍しい。

「寄呉明卿」その第五首の第一区と第二句に「長吏應憐(君拱) 道路傍。(君能如) 三年參佐(亦可) 有輝光」のように「君拱立於」「君能如此則」「亦可謂」を補入している。徂徠は生前の刊行書に訓釈を付けなかったと言われているが、(注十六) 没後刊行の『滄冥七絶三百首解』にも訓点はない。したがって、本来は中国語で直読するべきではあるが、あえて補入を加えて訓読すると「長吏應に憐れむべし【君】道路の傍【に拱立せしを】。【君能く此の如くんば則ち】三年參佐するも【亦】輝光あり【と謂ふ可し】」となるであろう。しかし『荻生徂徠全集』での訓読はこの補入を挾注と判断して訓読しない。「長吏應に憐れむべし道路の傍ら、三年參佐し輝光あり」と読むだけである。徂徠の補入は恐らく直読用ないしは黙読用であろう。したがって訓読しないというのも一つの見識ではある。ただ、訓読があくまでも読者サービスと考えるならば、補入を加えた訓読もあつてよかつたのではないかと考える。

七、結語

これまで述べ来たように、蕩益大師と荻生徂徠の補入の法を受けて、大典は『唐詩集注』をまとめたのであるが、『唐詩集注』における補入は六十四首に見られる。『唐詩集注』刊行の二年後に出た『唐詩解頤』では百三十三首に補入が見られ、補入が二倍以上に増加した。一方で、『唐詩集注』の補入を『唐詩解頤』では不採用にしたものも三分の一近く、二十四首に存在する。(注十七) これを要するに、『唐詩集注』の補入は宇野明霞の仕事であつて、大典は明霞の補入を取捨選択し、

それに新規の補入を行って『唐詩解頤』を撰述したものと考えるべきである。

さらに重要なことは、『唐詩集注』の補入は本文の訓点とは関係がなく、『絶句解』と同じような性格にとどまっていた。しかし、『唐詩解頤』では詩の本文に含めて訓読し、『唐詩集注』に施された旧点を修正するべく新点を打っているのである。薄益大師に源を發し、荻生徂徠と宇野明霞を通じて伝わった補入読解法が、ここに及んでようやく訓読として結実することになった。

荻生徂徠の訓点は『六論衍義』の白話傍訓を除くと門人による付加が多く、どこに徂徠独自の訓読が見られるか、これらで具体例でもって十分に検討されることがなかった。^(注十九) 本論は積大典の補入読解法の分析を通じて、詩に関する限り、たとえ黙読ではあっても、徂徠独自の訓読法がこの補入であったことについても示唆できたと思われるものである。

注

(注一) 山岸徳平『近世漢文学史』(一九八七年、汲古書院)にも大潮・明霞の伝記や著書や作品の紹介がある。ただし関連人物の文字表記などには、人名辞典等の誤りを襲うところがあるので注意が必要である。

(注二) 徳田武「宇野明霞の訓法の悲劇」(『江戸漢学の世界』一九九〇年、ペリカン社)では石見論文を参照しながらも、『文語解』『詩語解』ともに「明霞の著述として扱って、それに基づいて『明霞遺稿』中の難読の読みを定めてゆくことが許される」として論述するが、『詩語解』までを明霞の著述とするのは、和文漢文の相違すら無視する点で、賛成しかねる。ただし、徳田氏の所論そのものには大きく抵触はしない。傾聴すべき所論である。

(注三) 安永五年初刊本は日付の左下に「平安書林文林軒欽行」、欄外に「京室町通六角下ル町田原勘兵衛」の文字が見えるが、再刊本では削られている(初刊の情報は一橋大学の公開画像に拠った)。

(注四) ただし、書誌情報では、書名の読みを「とうしかいしん」と誤り、大典の識語も「寛政十一年庚申五月」と年次を誤って紹介する。

(注五) <http://collections.lib.niigata-u.ac.jp/bibliograph/search>の画面から『唐詩解頤』の検索が可能である。

(注六) 服部南郭の訓読は日野龍夫校注『唐詩選国字解』1・2・3(一九八二年、平凡社東洋文庫)によった。『唐詩解頤』の返り点送り仮名は補入前のものと補入後のものとが併記されているが、本論では訓点を表記できないので、補入後の訓点にしたがって書き下して示し

た。

(注七)「冬日洛城北謁玄元皇帝廟」(杜甫)の第十一句第十二句「世家遺舊史、道德付今王」には「雖」世家遺【于】舊史、【得】道德付【于】今王のように、接続詞「雖」前置詞「于」などともに可能を表す動詞「得」を補う。服部南郭の訓点にしたがえば「世家(せい)か)旧史(きゅうし)に遺(のこ)し、道德(とく)今王(こんおう)に付(ふ)す」となるが、大典の訓点にしたがえば「世家舊史に遺せども、道德今王に付す」ことを得たり」となる。老子が『史記』に名を残すだけでなく、杜甫が参詣した新建の老子廟の威容によって、今の世にもその教えをアピールできるようなったという、その可能性を前景化することになり、補入の効果が大きい例である。

(注八)『唐詩選国字解』1の日野龍夫氏【補説】には「国字解の誤っていることは明らかである」という。

(注九)「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」では方位詞「東」が補入されている。方位詞の補入はほかにはない。

(注十)「送杜十四之江南」の第一句「荆吳相接水為郷」に「荆吳相接【之處】水為郷」のように動詞句「荆吳相接」を場所名詞「處」の修飾語にしてしまい、「荆吳相ひ接【するの處】水郷と為る」と訓読する。動詞句に場所名詞を補入した唯一の例である。

(注十一)「聽江笛送陸侍御」(韋應物)では「別後」、「江南行」(張潮)では「去歲」「今年」などという具体的な時間名詞を補う点がほかのものとは若干異なる。

(注十二)『唐詩集注』は国立国会図書館の著者情報によれば、明李攀龍撰・明蔣一葵注・明唐汝詢解・宇野鼎纂・釋顯常集補となっている。国会図書館では鮮明な画像を公開していて容易に閲覧やダウンロードが可能である。

<http://dl.ndl.go.jp/infondjip/pid/2559842>

(注十三)姚秦三藏法師鳩摩羅什譯・清西有沙門滿益智旭解の『佛說阿彌陀經要解』は以下のサイトにテキストが公開されている。

<http://www.ouyi.nymaller.com.tw/ouyihm/004/004-1.htm>

(注十四)「おそらくは」と言うように推測の域を出ないのは、今のところ外典で確かな補入の実例を見出していないからである。しかし、明代の独特な評釈の在り方、たとえば金聖歎の『杜詩解』が、本文挟注に短評と、詩の後に詳細な評釈である「解」を併記した体裁は、どちらもメタ言語を記述したものであるが、こういう体裁からほんの一步でターゲット言語(＝詩の本文)と同レベルの語句を補入するアイデアが生まれるのではないかと考えている。その一步は大変大きなハードルの一步ではあるが、今後さらに探索してゆきたい。

(注十五)『荻生徂徠全集』(河出書房新社、一九七七年)第五卷『絶句解・絶句解拾遺』の解説による。

(注十六)原念齋『先哲叢談』徂徠の第十七条。

(注十七)同一の「首」のなかにおいて複数の箇所を不採用にしているものがあり、【】の単位で見ると、三十箇所が不採用にあたる。(注十八)徂徠の訓読理念についての考察は少なくない。近年においても『訓読』論(勉誠出版、二〇〇八年)に収める中村春作『訓読』の思想史や田尻祐一郎(「訓読」問題と古文辞学)など、訓読を否定した徂徠の学が、逆に宇野明霞の助字研究のスプリングボードになったり、その後の古典研究が訓読ではなく訳読の方向に向かいつつ、時代性を意識した古語の研究に向かったなどの論説がある。

【キーワード】
・唐詩選
・唐詩解頤
・訓読
・釈大典
・荻生徂徠